

先日、川端康成の「雪国」を読んだ。勿論以前にも読んでいるが小説というものは何度も読むとだんだん読み方、感じ方が違ってくるものだと思う。都会の騒音から離れ、山歩きを好む一人の男（島村）が周囲を山で囲まれた閑静な雪国の温泉街、越後湯沢に立ち寄る。

其処で知り合うのが駒子、葉子である。雪国の感じとしては、何かどんより暗い所、あるいは真っ白で清潔な銀世界、この特殊な雪国の温泉街の芸者駒子、そして都会の人には持ち合わせぬほどの素朴さというか、すっきりした、かわいい、年少ながらしっかりした大人っぽい考えをする、そして小さな心の中で一人前に悩みもする少女と女の過渡期の女性、葉子。

この二人が田舎の閑静にあこがれる一人の男と对象的に、この雪国で一生懸命生きていく姿は、同じ雪国の山の中を故郷に持つ私の心を今回痛めつけた。なぜかといえば、もし彼女が都会に育ったならば、化粧して派手に振舞いボーイフレンドとデートをしていたかもしれない、しかしこの大自然に囲まれた片田舎、昔からの行事風習のなかで、都会に比べればそれは地味であろう、しかしやはり女として精一杯生きつづけるその姿、それはいじらしいほどの純粹さ一生懸命さ、力強さを私に感じさせた。

独身男性が結婚相手として、いわゆるすれていない娘に心が動くのは、この全身で感じさせる美しさ、力強さのせいではないだろうか。とかく地方から都会に出て来た若者が都会人らしいスマートさに憧れ、またそうなることで何か優越感を持つようになるらしいが、それは違うと思う。私はむしろ田舎の人の身体全体から発散する心の美しさ、素朴さ、力強さを持つ人間になりたいと思う。

（二十五才春）

これは私が若かった三十五年以上の昔、ノートの端に記したメモであるが、今は都会も田舎もそれ程大差ない時代と言えるかもしれない。先日観たある韓国ドラマの中で、結婚前の心が揺れ動いている娘に父親が次のように語る場面があった。

「愛と結婚が喜びと幸せだけと思うならば、貴方達はきつとつまずいてしまうだろう。何故ならば、愛と結婚にあるのは喜びと幸せだけではない。悲しみがあり、傷があり苦しみも一緒にあるからだ。私もこれまで生きてみて本当に思ったよ、人生には苦しみがあるよ」

この人生の苦しみを共に乗り切るためには格好良さではなく、心の美しさ、素朴さ、力強さ、相手を想う優しさが必要なのだとドラマを観ていて改めて思った。又こんなセリフもあった「悲しみは二人で二分の一、喜びは二人で二倍になる」…  
…実に良いセリフだと思う。

真夏の寝苦しい深夜、ふとんから這い出し何気なくテレビのスイッチを入れると、ある海外ドラマが始まっていた。題名も分からぬまま暫く観ているうちに、段々ドラマの虜になってしまい四時まで見入ってしまった。

(ローザ・パークス物語) 1955年十二月、ローザ・パークスという四十二歳の女性が百貨店の仕事を終わり、疲れた体で乗り合いバスに乗車した。白人運転手が目をむいて「降りろ! 後ろの乗降口から乗りなせ!」と怒鳴り散らす。その間バスは動かない、無言で堪えたローザは遂に疲れた体を持ち上げ、一旦バスを降り後部の乗降口に向かおうとしたその時、突如バスの扉が閉まり走り出した。彼女は暗い大雨の中に一人取り残されてしまった。

それから何日か後、前部から乗ることを思いとどまった彼女は後部乗降口から乗り、疲れた体を座席に沈めた。その内に白人がどんどん乗車してきて空席が無くなってくると、運転手が座っている黒人に対し白人に席を譲るよう呼びかけた。他の黒人が全て立ったがローザは立たなかった。例によってあの運転手が側に来て激しく罵ったあげく「警察を呼ぶぞ!」と脅しつけるが、彼女は「あなたは どうしてそんなに 優しくないのでですか、どうぞ警察を呼んでください」と物静かに抗議した。その後すぐに警察がかけつけ、白人に席を譲らなかつたと言う理由でローザは逮捕されてしまった。

何というひどい話だ! と思うかもしれないが、これはそれほど大昔ではない、ケネディ大統領が誕生する僅か五年前のアメリカの現実です。当時、アメリカ南部の諸州では人種分離法が公然とまかり通っており、黒人は後部から乗車し後部座席しか使えず、バスは白人席、黒人席が分けられ、中間席は白人が居ないときは黒人が座ってもよいことになっていたらしい。ローザはその後、簡易裁判所で罰金刑になっているが、当時バスやレストラン等公共の場所では、人種を分離する法律が長い間実施されていたようだ。この勇氣あるローザの行動をきっかけに公民権運動が盛り上がり、その代表的指導者であったキング牧師は1968年に暗殺者により倒れ、差別制度が禁止されるという大きな改革が実現するまでには多くの犠牲がありました。

いろいろな歴史背景で強者、弱者が生まれ、悪法がまかり通るが忠実な市民は行動を起こさないと我慢する。その結果、不平等や人権無視がまかり通る。改革が行われた後世の人は「そんなことは信じられない! 間違っている」と簡単に言えるが、実際に自分が直面したときにローザのような態度を示すことが出来るだろうかと自問自答してしまった。日常の家庭生活、会社生活、地域社会において不当な行いや悪い習慣、不平等、弱い者いじめは起こっていないだろうか? 余りに日常的になりすぎて見過ごしている事はないだろうか。もし何か気付いたならローザのことを思い出してみる必要があるのではないだろうか。八月十一日が衆議院の選挙日になった。主権を持つ国民の義務として、政界劇場と傍観するのではなく、自分のことと考え必ず参加するという行動が今必要ではないだろうか。投票率八十パーセントを国民皆の行動で示したいものだ。

### 13・信念を行動で示す人もいた

「ローザパークス物語」をインターネットで検索したら、それに関連した映画、1990年製作「The Long Walk Home」があることを知った。

はたしてビデオがあるかどうか心配しながらツタヤに電話してみると、暫く待った後「大分古いカセットですが一本あります」との嬉しい返事をもたらした。

ローザパークスの事件をきっかけに黒人によるバスボイコット運動が起こり、老若男女、勤め人も学校に通う子供達もバスに乗らないで歩くか、乗用車の相乗りを続けた。黒人メイドが冷たい雨の日も風の日も遠路を歩いて通い、疲れているのを見かね、ミリアム（主人公の白人女性）は週に何度か車で送り迎えを始める。彼女は周囲の白人から嫌悪の目で見られ、差別社会の動向に流される夫との仲も断絶状態になってくる。しかし、子供の頃から黒人メイドと一緒に生活した彼女はどうしてもこの差別に納得できず、自分のメイドの送り迎えだけではなく一般黒人の相乗り運転手をはじめめる。白人の黒人に対する弾圧が強まるある日、ついにミリアムも白人暴徒に取り囲まれ危機に面する……とその時、断絶状態であった夫が我を忘れて助けに入る。

差別社会は黒人に多くの犠牲者を出したが、ミリアムのような白人にも危害が加えられ、時には殺害されたようである。ミリアムのような人はそれほど深い政治的な考えを持っていたわけではなく、ただ同じ人間としての思いやり、愛情、友情の趣くままに行動したのだと思うが、危険を感じながらも自分の考えを行動に移す白人も居たことを知り、何かほっとした気持ちになった。その後、このような一連の運動を背景に、ケネディ大統領が次々と差別制度禁止立法を実現することになった。

ドラマの中でキング牧師の演説を教会で聞く場面があった。「私達がやっていることは間違っていない、もし間違っているとすればこの国の裁判所が間違っていることになる、またアメリカの憲法、全能なる神も間違っていることになる、さらにイエスは単なる空想家と云うことになる」

暴力による抗争などではなく、一糸乱れない静かな市民運動に感動した。衆議院選挙が間近であるが、やはり市民は老若男女を問わず自分で考え自分の意思を投票で表すべきであり、安易に無投票だけは止めて欲しいと強く思ってしまう。

眠れない夜によく「ラジオ深夜便」を聴くが、先日広沢虎造の「石松三十石船道中」を聴き実に面白く昔を思い出してしまった。最近では浪曲をあまり聴かないが少年時代、青春時代に良く聴き、田舎にあった蓄音機で「追分三五朗」を繰り返し聴いたためにほとんど暗記してしまったものだ。

広沢虎造、寿々木米若、三門博、相模太郎、東家浦太郎、玉川勝太郎、春日井梅鶯などを懐かしく思い出す。また清水次郎長、石松、小松村七五郎、野狐三次や着流しに一本刀で一升徳利を肩に掛けた用心棒、平手造酒の姿を思い出す。

虎造のCDを聴きたくなりツタヤに行ったが、何処にあるのか分からぬので若い店員に尋ねた。

「浪曲のレンタルCDはどこにありますか？」

(浪曲ですね)と云いながら彼はまじめに探し出したが、暫く経ってから、

(それは大阪方面の曲ですか)と妙なことを言う。

「いや浪曲だよ、浪花節のこと……浪曲、浪花節を知っているよね？」

(いや、知りません)ごく自然に返事が返ってきた。では今まで探していた時間は一体何だったのだと思わず大声で吹き出してしまった。彼はげんな顔をして立ち去ったが、私は何か相当古い人間になったような錯覚に陥ってしまった。

どうしても確認したくなり次の日ツタヤに電話してみると、「そのようなジャンルは置いてありません」との返事が返ってきた。日本のすばらしい芸術が一つ消えかかっているのだろうか。

### 15・投票率 67.5% (2005.9)

九月十一日夜 選挙開票番組が一斉にスタートした。たぶん全国の大多数の人が興味津々「どんな結果になるか」と待っていたことでしょう。私としては、せめて今回は瞬間風速でもいいから七十七・五パーセントになって欲しかったが、前回の六十パーセント弱に比べて七パーセント以上増えたから、これはこれでまあいいか。しかし、その後の開票結果を見て開いた口がふさがらなかった。

やはり自民党が勝つだろうと予想はしていたが、大差のない二大政党の形ができ、緊張感のある政治を期待していた。しかし結果を見ると一連の小泉劇場、小泉首相の明快にタクトを振る姿に面白がり、多くが何かを期待したようだ。それにしても小選挙区の得票数では一・三倍なのに議席数では四倍になる選挙制度にビックリしてしまった。さて一時的な興味ではなく今後の政治を見守っていかねばならないが、翌日九月十二日の新聞紙上で目に付いた各種意見をここに列記してみたい。今回の選挙が新しい政治の真の出発点となり、世界で存

在感のある信望の厚い国、日本になることを切望しないではいられない。

●盛り上がった今回の選挙で、一番身近な小選挙区の投票が出来なかった人達が七十万人も居た。仕事などで海外に住む人やその家族だ。

(在外選挙権制限は違憲と最高裁が判決した、九月十五日朝刊)

●「五十五年体制」というのがあったが、今回は「〇五年体制」「小泉劇場体制」か。勝利の勢いあまって、肝心の日本が倒れないようにくれぐれもお願いします。

●独特な党首の独断による独り勝ち、自民党の独断上になって、独走、独善におちいらぬように。別の言い方をするると自民党は重い責任を負ったことを忘れないでほしい。

●「郵政」以外を明確に語れ。

●日本の政治が変わって欲しいと答えた人が八十パーセント。人口減少社会、七百七十兆円の借金、急速な少子高齢化 この将来への不安が八十パーセントの背景だ。

●海外メディア

前例の無い権限が与えられたと評価。郵政民営化、在日米軍基地の負担軽減、在日米軍の再編、インド洋などの自衛隊の派遣延長、イラク復興自衛隊派遣の延長、米国产牛肉の輸入再開、などに期待を示している。(アメリカ)

中韓は日本の右翼化を懸念、対アジア関係の悪化を懸念する声が上がっている。

中韓との関係悪化を懸念、憲法改正強行を恐れる (シンガポール)

小泉首相が念願の郵政民営化を果した後にどんな政治課題を掲げるか疑問 (英国)

ほぼ五十年間も同じ政党が政権を握る状態は民主主義として異常(フランス)

●経済界から歓迎の声。一刻も早く郵政民営化を成立させ、これを突破口にして懸案の構造改革をスピード感もって断行して欲しい。

●不況で打撃を受けている都市部の若者、高学歴にもかかわらず不安定状態に置かれている彼ら(無党派層)の憎しみを、不況でも身分を保証された公務員に向けさせた。

●郵政民営化は望ましいという流れを作り上げて勝利を確保、見事と言うほかない。小泉さんのスター性はすごい、私の好感度は再び急上昇。しかし、人間としては……。

●人々はこの選挙に参加したことで、選挙結果にどれほどの深い満足を得たのだろうか。

●女性の当選者は四十三人で、戦後最多。

二大政党の一方になり得る民主党の党首も昨日（9月十七日）決まった。二十一日から特別国会が始まるようだが、国会という職場では審議拒否ではなくとことん審議をし、国民に分かりやすく見せて欲しいとお願いしたい。このまま行くと日本の将来は真っ暗。自民党のためでなく民主党のためでもなく、日本の将来のために思い切った破壊と創造が必要だと思う。

国会議員というプロの立場で郵政民営化の内容を十分に吟味し、その結論として反対した多くの議員が、選挙結果を見て数日のうちに雪崩の如く賛成派に態度を変えたのにはビックリ、あくまで内容の改善努力、あるいは厳しく監視する態度を貫いて欲しかった。逆に民営化の内容に反対し落選した議員は普通の人になり、借金だけが残り、生活の糧をどうするか思案に暮れている人も居るようであるが、もしこの人が間違っていないとしたら実に皮肉なことであり是非がなばって欲しいと思う。

